

小袖について

里見 怜子

1. はじめに

服装は身分、職業を端的に反映するといわれているが、現代のように文化、思想の変遷のテンポの早い時代には被服の流行も激しく移り変わる反面、時流に逆らって復古調または元の姿を維持するものなど百態百様の感があり身分、職業も服装によって判別することが困難な場合が多くなってきた。

いつの時代にも常に新しいものに追随模倣する傾向とこれに逆らって伝統を保守する反動は存在するものであるが、洋服と和服の流行にもその両者が見られ、前者が流行の重点を形式（デザイン）においているのに対し、後者は模様と配色に主眼をおいているように見られる。

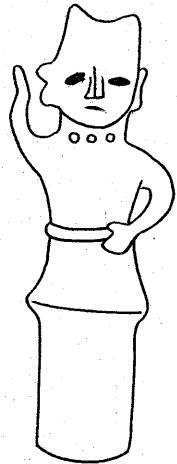
本稿では流行の主眼を模様、配色に求めてきた和服、特にその代表的存在である小袖（きもの）についてその由来を探り、鎌倉時代から江戸時代にかけて流行した染織と模様を若干紹介したい。

2. 小袖の由来

小袖は江戸時代に入って現在の「きもの」即ち表着に使われ、一般には絹布の綿入着物をさして呼んだ。同じ綿入着物でも木綿のものは布子（ヌノコ）と呼んで区別していた。小袖は上下一続きの衣服であるが、これに類する衣服はすでに奈良時代から存在しており、正倉院の御物のうちにも見られる。中国の史書「随書倭人伝」に日本の当時の風俗が記載されているが、それによると男は筒袖の裙襦（クンジュウ）を着、女はそれに裳をつけているとある。当時の人々が筒袖の短い襦袢のような着物を着ていた様子は埴輪（図1）の人物を見てもわかる。

室町時代に入って小袖形式は一般化し貴賤上下を問わず用いられたが平安朝の頃には民間男女のみ用いられ、上流貴族階級は上着としてはこれを着用しなかった。

古く「嬉遊笑覧」などによれば、小袖は袍、直衣、狩衣、直垂、水干などの下に着用されたので、下着としての性質上みな白衣であったが、その後鎌倉時代に及んで一般人の間では色染めの染小袖が流行した。ただし公家だけは相変らず白小袖を着用していたものである。平安中期には小袖は宮中の礼服下着の意であっ



たが、平安末期から鎌倉時代にかけて庶民の小袖風衣服をも意味するようになった。室町時代になると一般人の上着としても用いられるようになり、材料も緞子や糯子のような豪華な布地が使われ、更に江戸期を迎えて平常服として着用されるように至ったものである。

3. 染織と模様の移り変り

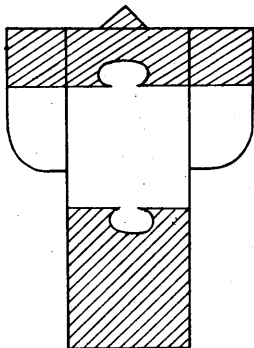
古くは下着としての適性、清潔感を満足させるために純白の衣服を得る努力が行なわれたが、次第に草木の花や葉を自然の形のままで衣服に摺りつけて装飾する粗野な方法が行なわれはじめた。やがて草木を煎出したり、発酵させたり、灰汁や酢の中につけて色を出すことが考えだされ、続いて浸染法も行なわれるようになった。奈良時代になり、大陸文明の渡来とともに織物も伝わり、染色技法も非常に進歩し筆で布に描くかき絵の方法が流行し、摺染の染型もやがて石などの自然物から彫刻した木型に変わった。平安時代にかけての染色技法の大部分は浸染法であり、鎌倉、室町時代には渋紙が発見されて型紙捺摺法が考案され、また絞り染も盛んに行なわれた。

(1) 鎌倉、室町時代

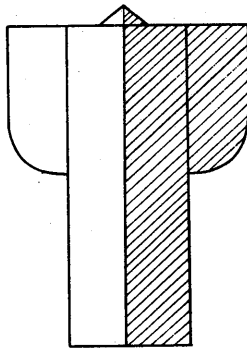
庶民の着ていた小袖や直垂には、鎌倉時代すでに相当絵画的な構図を持つ大柄のものが用いられていたが、染織技法としては非常に素朴なものであった。また貴族が用いた装束の下着としての白小袖も色や模様を取り入れた模様小袖に発展していった。当時の遺物は今日残ってはいないが、絵巻物にあらわれた模様は巻染、絞染や草花模様の飛模様が多く、その他は無地の色染である。

室町時代になると色小袖も茶、梅、茜、紅梅、紫、白などがあり身分、年令、階級によって色を異にした。小袖は室町時代の末期から上流と庶民の区別なく表着化してきた。当時の模様には白小袖の肩から襟の部分と裾を雲形や電光形などに区切って、この中だけ華やかな模様を入れ中間の胴の部分を白抜きにした肩裾模様(図2)とともに、右半身、左半身の色、模様をかえた片身替り(図3)とか、交互に異なった模様をつけた段替り(図4)が見られ、また摺箔という金銀

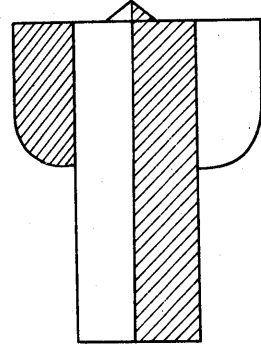
(図2) 肩裾模様



(図3) 片身替り



(図4) 段替り



箔押の葡萄色紙模様小袖もあった。

(2) 桃山時代

豊臣秀吉の豪放華麗な趣味と茶道趣味が天下を風靡し、服飾の上にも雄大豪華な非常に派手なもの、一面細かい模様の地味なもののが流行した。当時は縫箔即ち刺しゅうと摺箔を施したものと、辻が花染即ち絞りと描繪を施したものの二つの技法がともにその粋を競ったと物の本に書かれている。

摺箔とは色糸を自由に刺し加えて模様を出していく技法で多彩重厚で高貴な感があり、室町末期から桃山時代にかけて隆盛をきわめた。辻が花染は模様の部分だけ布を糸でくくり締めることにより防染して模様を現わしたもので、縫い締め絞りを主として、これに部分的なつまみ染や色の重ねなどあらゆる絞りの技法を用い、描繪の墨線やぼかしを入れたり摺箔を加えたりして、縫箔には見られない独特の染めによる絵模様をあらわしたもので、短期間ではあるが非常に流行し桃山時代には影をひそめたが、元祿時代に完成した友禅染の先駆をなすものである。

この期を代表するものに現存最古といわれる織田信長家臣、山口盛政夫人所用の「天文小袖」(縫箔小袖)がある。これは紗綾形綸子の地に黒と藍色の段模様をつけ、これに小菊、紅葉、小松の類をすべて直径2センチたらずの刺しゅうで埋めて、他は色違いの鹿の子絞りを一面に配り、斜に走る色彩と線で巧みに構成されたものである。

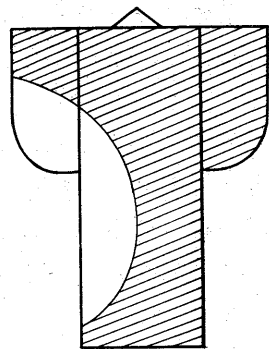
(3) 江戸時代

桃山末期から江戸初期にかけて、俗に地無しの小袖といわれる精細な模様の小袖が流行した。紅、濃茶、黒などの綸子地に絞りで大きく地取りした上を、繡と摺箔で地が見えないほど細かに模様を置いたもので、このような傾向は大体寛永から正保あたりまでを境として、次第にその模様が大柄なものに変わってくる。

承応年間には焔魔王や十王などの形を染め出した地獄染、卒塔婆染、五輪染などが衣服の模様としてあらわれ、明暦頃には御所染模様が流布し、京都だけでなく江戸、地方にまで流行した。

そして寛文年間には治世の安定と新興の意気盛んな気風は豪華で奔放な気あふれる大柄な絵画的な模様、寛文模様(図5)を出現させた。これは衣裳全体に七分三分と模様を配分した大胆なデザインで、模様は背を斜に右上に重点を置いて大きくあらわされた立木や花卉が多いが、題材は非常に豊富で、総鹿の子絞りの大模様や鹿の子絞り、刺しゅう、縫箔、描繪などによる多彩で絢爛とした小袖が遺品として見られる。この寛文模様の傾向は延宝、天和、貞享と移っても変わりなく、元祿

(図5) 寛文模様

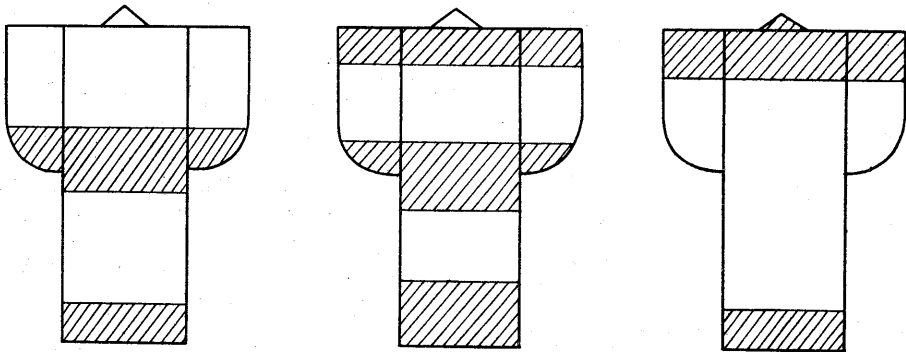


に至っての友禅模様にもその傾向が見られた。ただ元禄頃には帯の幅が次第に広さを加えたため、肩から裾までの一続きの模様が背で中断され、模様のつけ方が上下に分かれる傾向をみせ、地無し、切付、鹿の子、描絵を二段模様（図6）、三段模様（図7）、肩裾模様（図8）とその中間に違った模様をあしらうようになった。

（図6）二段模様

（図7）三段模様

（図8）肩裾模様



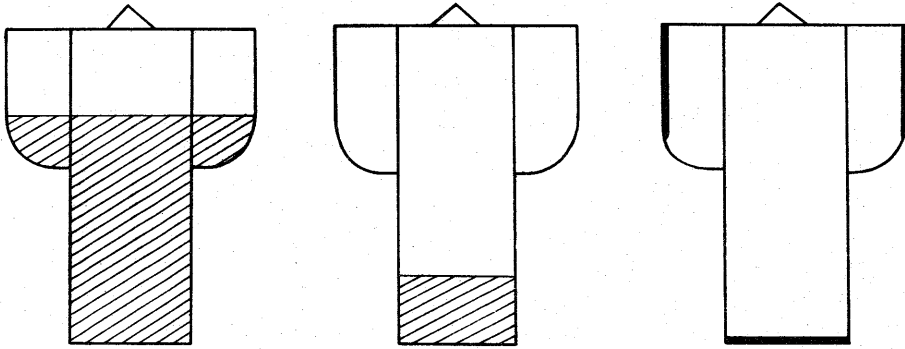
また延宝になってからは鹿の子縫箔の緻密な模様が復興したが、天和3年2月の服飾法度でそれは禁じられ、貞享に至っては寛文風をもっと巧緻にした装飾画風の大柄染が流行するようになった。

そして元禄から貞享にかけて、小袖染色技法の極致ともいべき、多彩で絵画的な絵模様を十分に発揮できる友禅染の技法が発達した。友禅染の起源についてはあきらかでないが、京都知恩院前で扇の絵を描いていた画工、宮崎友禅斎の創始というのが俗間のいい伝えである。友禅染は糊防染による描絵染の技法であるが、手描糊の染めに茶屋染というのがある。これは奈良晒の麻布に糊置きして白地に藍一色で山水、家屋、植物などを染めだしたもので、時代が下がるとともに模様も複雑になり色糸や金銀糸で刺しゅうをしたり、鹿の子絞りを配するものまであらわれた。この茶屋染の技法が友禅染に移行したと考えられる。糊で自由な線を描き、これに刷毛で染料や顔料を彩色して仕上げるといふ友禅染の発達は、従来の浸染による染法とは異なった、いわば小袖模様染における革新的新技法といべきである。元禄衣裳で有名なものに「冬木小袖」がある。これは尾形光琳が深川の材木商冬木三佐衛門のために描いたもので、胡粉、金泥などをもって淡白な色彩で秋の草むらを描いた絵模様で、描絵による衣裳の最高のものとされている。

享保年間になると腰高模様（図9）が流行し、明和になると裾模様（図10）

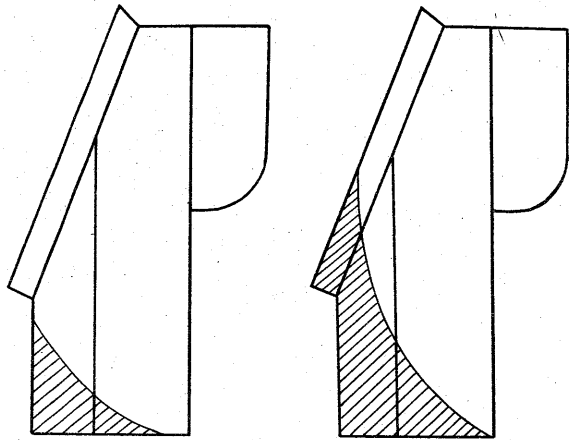
といって七寸、五寸、三寸模様と次第に模様の位置が低くなり、安永頃には表面を無地にして袖口、裾、胴裏に模様をつける裏模様（図11）が流行した。

（図9）腰高模様 （図10）裾模様 （図11）裏模様



天明頃になると一度裏に入った模様が再び表の襟にあらわれだし、前身の裾だけに模様をつけた江戸模様（江戸裾）（図12）、肩抜きといって肩だけに模様のない島原模様（図13）、そして裾模様の位置を少し高くして両袖にも模様を入れた高裾模様など様々な形式があらわれた。

（図12）江戸模様 （図13）島原模様



江戸後期に入ると模様の取材も出尽し類型化してしまい、主題を模様そのものよりその模様の持つ物語的な意味で見る人をひきつけようとする傾向が強くなり、近江八景の模様、源氏物語や能に取材した模様といったように、小袖模様が極端にその絵画性を強めたため、着用するより飾って眺める方が美しい小袖まであらわれるようになった。ここにおいて小袖服飾は形のうえや染織、材料の面で種々の変化、発達をして爛熟期を迎え、現代の和服へと引き継がれ、愛用されてきたものである。

4. おわりに

以上紹介したように小袖の流行は殆んど模様、構図の変化に終始しており、実

用性より芸術性を、運動性より装飾性を重視し、伝統の美を守りながら発展してきたといえよう。

流行は歴史であり、進展しても反復する波のようなものであろうことを考えると、和服、特に小袖の持つ寛やかさと美しさは、洋服の持つ活動性と形式のバラエティーに対するハンディキャップはあっても、人間が動的な反面静的なものを求め、また新しいものに追随しながらも伝統的な良さを守ろうと考えている限り、不死鳥のように流行を繰り返しながら愛用され続けるであろう。

この稿をまとめるにあたり、御指導いただいた奥平志づ江助教授に厚く感謝の意を表します。

参考文献

1. 服装大百科辞典 文化服装学院出版
2. 服飾近代史 遠藤 武編
3. 江戸服飾史 金沢康隆著
4. 日本の服飾美術 東京国立博物館編
5. 衣生活 1月号(1966)
6. " 12月号(")
7. " 10月号(1967)